

36 古い人よ、若人よ、目を覚ませ

人間性こそ

若き学徒が拙文を読んで、教職志望から福祉職に転じたい、との言葉がありました（毎日新聞・平成元年五月三十一日付）。たしかにいま福祉界に渴くがごとく求められているもの、それはこの少女のような人の心を深く感ずる福祉人です。しかし、福祉と教育の両世界にいた小生としては、福祉界の汚濁は外から見ると以上のものと思います。何らの福祉的素養も、経験もない人たちが福祉経営者に少なくありません。もちろん、眞の教師や福祉人は経歴、資格、学校で作られるとは限りません。人間性が根本です。福祉職にこそ何よりも強く人間性が問われています。

シュヴァイツァーは言っています。——いかなる条件の下においても、人間が眞の人間性をもって人間に働きかける。このことはいかに人類の将来はか

かっている。人生において多くの美しいものを手に入れた者は、その代わり、やはり多くのものを提供しなければならない。自分の苦悩を免れた者は、他人の苦悩を軽くしてあげる責務を感じべきである。わたしたちはこの世に存在している不幸の重荷をみんなと一緒に担わなければならない――。

福祉職でありながら、こうした人間性への希薄な職場や管理者の下では、純粹な若者は耐えきれず、挫折に追い込まれます。

ある寮母からこんな便り。――園長夫婦が着飾った孫を各部屋に連れ歩き、お年寄りから一万円、五千円とお祝いを頂き、またお礼を言って歩く。同室の、あげなかったお年寄りよりも私の方がいたたまれなかった……。

もっと情けない話も。

某ホームの園長の妻死亡。お年寄りの自治会から四十万円の香典を受け取った。多すぎるので県監査員が問うと、園長の弁明――社会通念は一人一万円が普通、八十人分の半額四十万にすぎない、と。

日夜、犠牲的に働いている人たちの中に、こんな経営者もまじっていること

を若き福祉学徒には知ってほしいのです。こういう利用者不在の経営者の下では、職員もそれに右へ倣えしがちです。

少し古いが某市での話。何年もお年寄りが肉を口にすることがない、との訴えで、市議会が調査したら、ちゃんと購入はしていたが、職員が山分けして持ち帰っていたのです。盆、年末には車でもらい物を競うがごとく満載して帰るといった風景も長く続いていたのです。経営者の質の悪さによっては、「寮母は暴力集団」になっており、経営者、園長の次は「自分たちが主人公」のごとくふるまっている、との報告もあります。

あしき土壌の上でも

「水を飲ませて下さい」と訴える老人に「まだ死にはせん」と言い捨てたり、おしめを替えてと訴えても「時間がくるまで待って」と。

ここではこうした無数の悪例を列挙するのが目的ではなく、そんなあしき土壌に運悪く降り立っても、それに抗していけるかどうか、それをまず自らに問

うべきだということです。

負ける、負けないではありません。あなたがそれを改善するかしないか、が問題です。私立だからそうなんだ、公立なら大丈夫と思う人も多いでしょう。しかし、現実には公立のほうが問題が多いのです。福祉施設でこそ「役人仕事」のあしき典型を間違ひなく見せつけられます。「あまり働くな」という組合幹部、元日でもパン食などと。さきの「肉」分捕り事件の公立ホームでは土曜日の夕食は三時半でした。某ホームの夕食は、職員はすべて帰宅し「缶詰一個を二人であけて食べよ」でしたし、また、某夜は、魚屋が厨（ちゅう）房に入り込んで少量ずつ刺し身を分けていました。それだけの夕食。

だから、あなたが福祉界にふみとどまるなら、まずあなた自身が強くなることです。ひとがよくしてくれるのを、あてにしてはいけません。

ここで畏敬する先輩・永杉喜輔氏（群馬大学名誉教授）の助言を――。

福祉をする人はまず自分を鍛えることだ。自分が人間的向上を目指して進めば、よい仲間、よい人間関係が必然的に出来るものだ。自分がしゃんとしない

で、よい人間関係が出来るはずがない。よい仲間、よい人間関係は自分が無限の向上を努力するところにのみ生まれる――。

職場にごく少数でもよい、良心的仲間が出来る、やがてたいの改善は出来るようになります。仲間といってもキャーキャー笑ったり食べたりするたんなる仲よし仲間のことではありません。なさんとする志のある仲間です。そんな仲間づくりはひとのするのを待たず自分から始めるものです。よい仲間が自分を中心。自分が地道に支えるべきものです。それはリーダーになることではありません。えてしてひとはリーダーになりたがる。また、リーダーを求めたがります。仲間は志を中心に、全員平等でリーダーを必要としません。このところが若者たちにも理解し難い。人間にとって最も困難な人間関係の作業だからです。

主人公は経営者？

毎日新聞・平成元年八月三十日付〈ポスト〉欄に、萩市の婦人の便り――

「広い前庭にバスが着くと数人の職員がホテルのように丁寧に迎え、海の見えるロビーに案内され、冷たい飲み物が運ばれ」お世話上のさまさまのおいしい言葉がそれに続き、安らかな老後の保証があるとうたいあげた。つぎに案内案内。「断わりもなく入って来た見学者たちに、ベッドのお年寄りたちは身を硬くして壁に向いていた。その場にいたたまれず早々に退出——」。

婦人がその手記につけられたタイトルは『施設の主役は？』でした。施設にはこうした傾向、施設の主人公は誰だろうかと疑問を抱かすような面がしばしば見られます。主役は当然、利用者たる高齢者です。

婦人が指摘されるように、この経営者は初歩的なところでつまずいています。自分のホームだ、主人公は自分だ、と確信している。本人にとっては城らしきものでも築いたつもりだから、それを見てもらいたい。たくさんの見学団のバスが連日連なってくれば、それですべてよし。こうした見学者集めに奔走する経営者の何と多いことか。だから民生委員たちもまるで大通りを歩くように部屋部屋を無断で見回して少しも失礼とは思わないのです。

こうした見せものとしての施設に腐心する——施設経営者の一番陥りやすい弱点です。

理論と行為

毎日新聞の昨年（平成元年）七月二十五日付の〈心ゆたかに〉欄におこがましくも小生登場。その紹介記事で重度痴ほう老夫婦の性のことで、夫が妻の上に乗ろうとしては落ちている姿を見かねて、二人の寮母が両方から夫を妻の上で支えたという文章の一部分が紹介されました。それに対してある婦人が、いくら夫婦でも妻の合意もなし（合意不能でも）では、人権問題だ、とご指摘がありました。大事な批判ですので、その全文とお名前をここに公表して皆で考えたいとお願いました。が、「お断わり。任運荘の努力に免じてそのことは不問にしてあげたのだ」と。

私はここで私たちのその時とった状況を説明しようとは思いません。もちろん、それが十全なやり方とは思いません。男性中心のやり方であることは明らか

かです。ここで考えたいことは私たちの実践（行ない）、あるいは理論と行為の関係についてです。それは避けて通れない重要問題だからです。

あれはそのことを考えるよい実例でした。「放つとけ、どうせありがちな老人の性の残り火、どうということもない」——この考えは、何もしないという察母の一つの決断。「いや、今わの際きわの欲望、夫婦だし、助けて心を満たしてあげなければ」——これもまた一つの決断。実は私たちはいつもどちらにしようかと決断を迫られています。「あれか、これか」「いずれかを選ぶ。」「あれも、これも」はあり得ません。

「泥棒にも三分の理」。どんな行為にもすべて理論がつけられます。行なう前に幾つかの理論があります。どっちかの理論を選んで、それに従うことを決断する。一方を断ち切って他方に決めて行なう。だから、決断です。生きているということはそういう仕組みの中にあることです。せめて理論的にでも完全ではありません。望ましいのですが、それはほとんど不可能です。一見極めて簡単な社会事象でも、あらゆる構成要素をとり出し八方から分析し、すべての可能

性を究め尽くすことは永遠の課題だからです。

だから、私たちがしなければいけないことは、自分の中にひそむ先入観、思い込みを常に吟味し、途中でその疑いを止めないことです。しかし、私たちはいつまでも理論的正しさが決まるまで待つてはおれない場合が多く、ある所で踏んぎりをつけて日々の行動をすることを求められています。ですから、全方位に向かつて正論である、ということはありません。あるとすれば、実は何もしない無責任な立場です。その意味で、ゲーテは「行動者は常に非良心的である」と言っています。

重要なことは、正しいとする理論と、わが決断し行為することの間の矛盾、相反を、私たちがどう生きるかです。その矛盾相克が人間の宿命、その宿命を引き受け、責任をとる。責任をとる——これこそ真人間とそうでない者との分かれ道です。

憂うべきは若者の老化

これまで役人を非難してきました。それは日本の公務員たち、わけても福祉行政者たちは「終わりを少しずつでもよくしよう」と願う人たちの心と遠く離れていることが、事実において幾らでも散見されるからです。

私は大分県で福祉行政に従っていたことがあります。後輩たちは同じ役人をしていたくせに役人を非難する、と私を逆非難します。公務員の経験があるからこそ、役人に非があれば、これを批判する義務があると信じます。証拠がつかめ、内実を知らなければ、あてずっぽに言えばたちまち誣告むごうに問われかねません。

同一法規を基準にして、ある人には諾、他の人には否、と法解釈も人によって自由に運用されることもまれではありません。いわゆる「特別」運用です。例えば某病院の不正事件で、普通なら営業停止処分です。当時の知事は、処分を主張する小生に命じて、「あの地域は医療機関が少ないから処分をするな。医療施設の密集地帯なら断固強行処分だ」と。こんなヘリクツを得意とする人

に、有力者の群がる密集地帯ならなおさら出来るはずはありません。

暴力団まがいの施設乗っ取り屋への県の弱腰にも、私の経験に照らして厳しく地元紙で批判しました。福祉行政に限らないが、行政の習性として、強い者には弱く、弱い者には強い傾向が存しがちです。こうしたことへの発言を厚生省にも県にも控えるべきでない。それが小なりといえど私の責務と考えます。

私のような行政と福祉実務を経験した人はたくさんいます。その人材が「終わりよき時代」を仰望して声を大にする時、「すべてよし」の秋あきは、やがて到来するのです。

終わりに希望なければ、だれも生きることができません。終わりが一切よいからこそ、今の苦も耐えられます。

「終わりよき」ことを可能にしない根本弊害は二つです。一つは老人層の体制への絶対従順の無気力——微々たる老人クラブ助成金に批判精神を眠らされ、官製ボランティア活動にのみ依存協力し、一大政治力になるべき力をゲートボールに発散していること等。もう一つは理想喪失の若者層をおおう著し

家庭

「家庭」をテーマにした、現代社会の家庭のありかたを、若い世代から、中年世代まで、幅広く取材した。現代社会の家庭のありかたを、若い世代から、中年世代まで、幅広く取材した。現代社会の家庭のありかたを、若い世代から、中年世代まで、幅広く取材した。



豊かに

ホームのお年寄りに献身
寮母さんこそ宝ですよ



特別養護老人ホーム「任運荘」施設長 吉田 明義さん 70

「悪いほどは心よわきもので。み心をなくさぬたまえ朝な夕なに」
——吉田さんは寮母の言葉が好きだ、という(撮影・西山 正寿)

人平へ入居する高齢者が、年々増加している。特別養護老人ホーム「任運荘」施設長 吉田 明義さん(70)は、この増加する高齢者の生活の質を高めるために、寮母の役割を重視している。寮母とは、老人ホームで暮らす高齢者の生活を支える役割を担う職員のことだ。吉田さんは、寮母の役割を「宝」として大切にしている。寮母の役割は、単に生活のサポートだけでなく、高齢者の心身の健康を支えることにも関わっている。吉田さんは、寮母の役割を「宝」として大切にしている。寮母の役割は、単に生活のサポートだけでなく、高齢者の心身の健康を支えることにも関わっている。

寮の頭で有名だ。吉田さんは「任運荘」の寮母さん。寮母の役割は、単に生活のサポートだけでなく、高齢者の心身の健康を支えることにも関わっている。吉田さんは、寮母の役割を「宝」として大切にしている。寮母の役割は、単に生活のサポートだけでなく、高齢者の心身の健康を支えることにも関わっている。

い「老化現象」。この二つの克服なくして「終わりよき時代」が到来するはずはありません。とくに、若き世代の理想喪失の危機的状況にいま少し

ふれて、本章を終わります。理想なき青年は、もはや青年ではなく、理想なき世代の出現こそ最も憂うべき社会といわねばなりません。

もちろん、青年の理想喪失は青年自身が選びとった道でも何でもありません。日本の現代社会体制から必然的に導き出された結果にすぎません。高度技術社会、生産性絶対の管理社会は、二つの方向において破壊的ともいふべき結果をもたらしています。

一つの方向は、わが高年世代に対して為なされています。高年者世代を覆っている生き甲斐喪失感にそれが如実に見られます。高年世代の長年の経験の蓄積、知恵を役立たずとして蔑視し、生産性の妨げにしかならないとしているのです。不断の技術革新を本流とする技術工業社会においては当然の帰結です。

もう一つの方向は、若き世代に対して為なされています。青年期特有の珠玉の如き理想主義もエネルギーも、生産・管理の至上命令の前に首くびを垂れさせられ、物質的利益追求のみが価値として教育されています。技術主義を最も最高の倫理の如く押しつけられています。青年が「宝」であるというのも、かつて

の如く、世の改善変革の先駆者であるからではない。支配する中年世代の管理体制に、単に馬力として従順である限りにおいてのみ、貴重とされているにすぎません。

当然、ここでは体制のもつ欠陥を批判、改善せんとする青年特有の魂は麻痺させられ、青年性の破壊だけしかありません。体制が期待する物質的、経済的価値の追求にけんめいであれば、必然的に老年層の存在は負担物以外の何ものでもなくなり、老人軽視の先頭に立つことになります。かりに老年世代がこれに反発するとすれば、老若戦争の形をとり、人類の破滅的段階に至りかねません。

かく若者からは理想に燃える美しき魂が失われ、老人からは安らぎの終わりの日目が奪われる体制であるならば、根源的欠陥を病む社会といわねばなりません。本来、若者と老年とは味方同士です。なぜなら、ひと皆は老いるからです。

ひとはまちがいなく老いて死ぬという観念こそ、現体制がかりたてている物

質追求、管理的地位志向、経済的幸福の脆さと空しさを、明確に指摘する唯一の松明たいまつです。この観念こそ、人生の深き喜びと理想主義に生きる人間的幸福を真実、教示しうるのです。老年の厚き深き知恵と経験、青年の理想主義、両者が相結ぶとき、終わりよき新しき世界がようやく動き出しているのです。

老人と少年

私はヘミングウェイの『老人と海』の老人と少年の会話を涙と共に思い出します。

メキシコ湾の老練な漁師サンチャゴにもついに絶望的な晩年が訪れようとしています。独り漁で傷つき疲労こんぱいに倒れ臥している所へ、ひとりの少年が介抱にやって来ました。家族からはもはやサンチャゴの船にのることを禁じられている少年です。

少年―「また二人で海へ一緒に行こうよ」。

老人―「だめだ。おれには運がついていない。運に見はなされちゃったの
わ」。

少年―「運なんて何だい。運はぼくがもっていくよ」。

老人―「君の家のもんが、なんていうか？」。

少年―「かまうもんか。ぼく、きのう二匹もとったんだ。でも、これからは

二人一緒に行こうね。ぼく、いろんなことを教わりたいたいんだもの。……

手を早く治しておかなくちゃ。寝てなよ。お爺さん。きれいなシャツ

と何か食べるものも持ってきてあげる。じっとしててね。お爺さん。

手につける薬も買ってこよう」。

少年は戸をあけて出ていった。くずれた珊瑚礁の道を歩きながら、少年は

また泣いた――。